見よ、悲しくて涙を流す人
嬉しくて笑を湛へる人
怒る人、嫉む人、愛し合ふ人
そして血みどろに働き汗する人々
是等全ては笑はれぬ喜劇だ。

綠色の垂れ幕が
靜かに上げられて行く――
人間劇場に涙の喜劇が演じられるのだ
見よ、目まぐるしく踊る其姿を
泣き、笑ひ、怒り、悲しみ、諦らめる
そして終に何物をも摑み得ず
演じ果てた踊子は
闇黑の奈落へと亡びて行く。

古きより新しきへ
弱きより强きへ
新陳代謝を繰り返す
我等の戯曲は
何處迄操り展ろげられて行くのたらう
苦と慾の世界よ
久遠の古より永劫の未來まで
不可解な謎を以て進む
我等の人間劇場。

短歌　身延の一とせ

小島一誠

一、門松の洒々とゆかしき町のさま、
　さすが八島の人のよる山

二、白雪の御山をおほふ嚴そさや、
　祈らぬ人も涙ならまし

三、見覺の芹つまむとて來にけれど
　香のみ漂ふ春の若日に

四、法服に學帽かむる珍姿
　うれしげに行く新學期かな

五、行きかへる人の日毎に込みあふて
山の小鳥も忙しげに啼く

六、わが祖師の分け入り給ふ其頃を
今は夢路に辿る初夏の夜

七、汗ふきつ登れば山の頂きは
御法の風にいとも涼しき

八、木のかげにつと入りぬれば眞夏日も
打ち忘るごと谷川の風

九、今もなほ木の果、草の實、茸など
御山にありて昔語るも

十、此の山の月はとりわけ尊しや
雄々しき峰の上にかゝれば

十一、から木立あたり靜けき夕空に
山門いとど高く聳ゆる

十二、思ふより風もやはらし山の冬
こゝろ安かれふる里の親

雜報

研究會

講師及參聽者派遣表　（丸山顯孝記）

大正十五年度

	講師	講題	參聽者
第一回	六月五日 清水龍山師	宗學ノ振興ヲ望ム	高田惠忍師 丸山顯孝師
第二回	六月十九日 高田惠忍師	信仰ノ皈趣	泉　義敬師
第三回	九月十八日 高田惠忍師	信仰ノ皈趣（續）	永倉唯嘉師
第四回	十月二日 北尾日大師	吾宗先師ノ本尊觀	江利山義顯師
第五回	十一月二十日 河田惠量師	本門本尊實存性ニ就テ	鹽田義遜師